

JAMの主張

“苦しい時こそ前に出ろ、 新しい労働運動に果敢に挑戦

第22回定期大会あいさつ（抜粋）

JAM会長 安河内賢弘

【機関紙JAM・2020年8月25日発行 第259号】

毎年のように一連の豪雨災害が猛威を振るっています。私たちの仲間の工場の多くは、比較的住宅地としては好まれない河川の側にあります。豪雨災害がこれ以上悪化していくことは地方の中小製造業にとって製造所存続の危機となります。私たちはこの問題に無関心であることはできません。従って、短期的には国の管轄外である小さな支流も含めた河川の洪水対策を進め、長期的には気候危機に対してより積極的な対策を講じる必要があります。さらに、サプライチェーン全体を補完したBCPの確立も急務となります。こうした問題にもJAMとしてしっかりと議論を重ねる必要があります。

COVID-19は私たちに様々な課題を突き付けています。この間、今までの日常のあたりまえが、自粛、自粛、自粛を強いられてきました。JAMでもオンラインでの会議を進めており、ようやく少し慣れてきたところですが、正直に言って、これまでは手探りの対処療法に過ぎませんでした。残念ながら問題の長期化が強く懸念される中で、私たちは、より積極的に新しいコミュニケーション、新しいビジネス、そして新しい労働運動に果敢に挑戦することが求められています。変えるべき運動は何か、そして同時に決して変えてはいけぬ運動は何か、議論を深める必要があります。いずれにしても運動を前に進めていきましょう。“苦しい時こそ前に出ろ”これはボクシングでよく使われる言葉ですが、私の出身母体である井関農機の創業者、井関邦三郎が好んで使った言葉でもあります。

いくつかの単組で、雇用に係る問題が発生をしています。そして状況はさらに悪化をしております。雇用と生活を守る闘いはすでに始まっています。JAM本部としても連帯を強化し、単組・組合員に寄り添う活動を強化していかなければなりません。団結こそ力です。より多くの仲間の結集を強くお願いします。

政治の状況に触れます。決して変えてはならないものの一つにJAMの理念があります。JAMの理念を踏まえれば、私たちが選択すべき道は、より多くの仲間の力を結集し大きな塊をつくる以外にないと考えています。それぞれの地方で難しい対応が求められていると思いますが、JAMはあくまでも連合が一丸となって、すべての労働者に尊厳のある労働と生活が保障される世の中の実現をめざしていかなければならないということを主張していただきたい。

IT化の遅れは生産性の低迷や取引先の寡占化を招き、労働条件の低下に直結しています。誰一人取り残されることがないようにDX（デジタルトランスフォーメーション）に対応した新しい時代の「ものづくり進化論Ⅲ」の策定に、本年度より着手してまいります。

世の中に出回っている働く者の現場からほど遠い多くの著書とは一線を画し、ものづくりの現場の立場から世の中に対して大きな答えを示すことができると考えておりますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、激動の時代の定期大会に相応しい活発な議論をお願いし、JAMを代表しての連帯のご挨拶にかえさせていただきます。

共に頑張りましょう。